

アジアの障害者支援における研修生と受け入れ側の様相 ——メインストリーム協会の実践から——

権 藤 眞由美

(立命館大学 OIC 学生オフィス 障害学生支援室)

I. はじめに

本稿は、海外の障害者と国内の障害者とで、文化や国の事情を超えて、同じく障害のある者として、相互に十分に理解し、支援し、支援されることは可能なのだろうか、という問題意識を背景としている。そうした問題意識に基づき、障害者が海外の障害者に対して支援する際に、そこで、実際に行われていることはどのようなものであるのだろうか。その実態を、実例により記述し明らかにすることが、本論文の目的である。報告書などの記録に残らない実態の把握を試みるものである。

国際協力の分野において佐藤仁は「技術協力や留学・研修という国境を越えた人間関係を前提に信頼を位置づけ、それが成り立つための要件を問い（…）信頼こそ良好な依存関係の基礎である」（佐藤 2021:96）とした。国際協力の分野においては、ある種の相互理解が要件であることを示唆しているが、障害者の研修分野などについては言及していない。また、中西由起子はアジア各国からの障害者の受入事例をとりあげ、CBR¹⁾との比較を行うなどしながら、事業全体の成果を評価するが、個々の事例について研修の名の下に具体的にどのようなことがなされていたのかについて詳細に述べていない（中西 2008）。研修、特に障害者に対する研修については、極めて個性が高く、一般化して描写することが難しいことは理解できるが、しかしながら個別にかつ具体的に分析を行うことは必要であろう。さらに、海外における研修事業に関しては、派遣される研修生の言説は、レポートの類により多く公表されているが、研修生の受け入れ側である機関等の実態に言及されたものはない。

次節から研修で受け入れる側と受け入れられる側の「障害（者）」に焦点をあて、主に受け入れ側の視点から考察をすすめていく。海外からの研修生を受け入れている一つの団体を事例として取り上げる。具体的には、1999年からアジア・太平洋地域から母国で障害者リーダーを目指す人たちを日本に招聘し、障害者福祉や文化などの

学びを帰国後に活かすことを目的とした「ダスキニアアジア太平洋障害者リーダー育成事業」²⁾の受け入れ先のひとつであるメインストリーム協会を調査対象とし、その構成員およびこの事業にかかわった担当者への半構造化インタビュー調査に基づいて検討する。

II. メインストリーム協会設立と海外支援

1999年から2018年までダスキニアアジア太平洋障害者リーダー育成事業における研修生の受け入れをしているNPO法人メインストリーム協会³⁾（以下、メインストリームと記載）は、兵庫県西宮市で1989年11月に設立された。メインストリーム設立の背景には、以下のような流れがある。1986年から毎年夏に「TRY86」と称し大阪—東京間を車いすで移動し各駅のバリアフリーチェックを行う旅をしていた。このTRYメンバーが1989年9月「第9回車いす市民全国集会・兵庫」⁴⁾の事務局を担うことになった。大会では、アメリカ放浪の旅から帰国したばかりの廉田俊二⁵⁾（以下、廉田）が提案したアテンドシステム（有料介助者）が導入された。廉田は、大会準備の過程でコアな事務局メンバーの活動をみて自立生活センター設立を構想する。同年、11月に「第9回車いす市民全国集会・兵庫」の事務局メンバーと共にアテンドシステムの継続と重度障害者が地域で暮らせる社会を目指し「西宮をパークレーに！」という思いを掲げ、メインストリームを開設した。メインストリームが海外支援といわれるものに初めて携わったのは、朝日新聞厚生文化事業団の「アジアの障害者に車いすを贈る市民の会」⁶⁾である。廉田が知人に声をかけられ車いすを集め送ることになったのだが、支援に関わる際に要望をだしている。

廉田：「車いす屋じゃないんやし、俺ら自立（生活）センターやから、それは人の交流が必要やし車いす送るだけじゃなくて、障害者を連れて行かしてくれ」と。「行って、向こうの障害者と会う機会を持って、自立の

話とか人権の話とかできるような。物渡して、はいさよなら、じゃなくて、障害者同士が会えるような場を設定してほしい」とこっちから要望したりして。そういう形になっていった」(廉田 i2018)

廉田は車いすを渡すという行為からもうひとつ先に踏み込もうとしている。日本での「彼らは、日々の暮らしに現実に対応しながら、可能な道を探ってきた。いったん見えてくる難しさにどうつきあっていくのか」(安積他1990:5)、そして、どうつきあってきたのか。彼らは、その周縁にあるものと、ある時は対立し戦い、ある時は巻き込み巻き込まれながら対応してきた。そうしたことを経て、障害のある彼らだから言えることがある。まだ制度がなかった時代に介助を必要とする障害者がボランティアを引き留める秘訣は自分のことや障害者運動のこと、いまやっていることをたくさん伝えることであった。(青木他2019:113)そして、障害者運動の仲間である障害者同士との間にも、その時々には決して穏やかとは言えないような「対話」をも重ねた先に障害者運動団体と成した。自国で障害者としての「当事者主権」⁷⁾を主張するには、前段階であるその先をゆく他国の障害者の現状を知る機会が必要不可欠なのだ。廉田が要望した「場」はその「対話」の機会を意味している。

Ⅲ. 日本障害者リハビリテーション協会からの研修生受け入れ

メインストリームにおける海外支援の本格的なかかわりは、公益財団法人ダスキン愛の輪基金から「ダスキンアジア太平洋障害者リーダー育成事業」を委託された公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会(以下、リハ協)の担当に奥平真砂子⁸⁾(以下、奥平)が着任し研修生の受け入れをメインストリームに依頼したことである。

廉田：自分たちの主催じゃないけど、人のに乗っかって、海外との絡みはあったんですよ。(省略)でも一番大きいのは、99年のダスキンがアジアの研修生を受け入れる…、「アジア太平洋障害者リーダー云々」。あれを受け入れることで、奥平さんが絡んでますけども。1期生から始まって、毎年受け入れる。(廉田 i2018)

廉田と奥平は「アジアの障害者に車いすを贈る市民の会」で意気投合し接点があった。このふたりの接点が後

のアジアの障害者たちが自立生活センターを立ち上げていく繋がりになったといえる。1999年にダスキンのアジア太平洋障害者リーダー育成事業が始まり、リハ協の奥平からメインストリームに1期生のインドネシアのリンタン⁹⁾(ポリオ)という車いすを使っている女性の受け入れを打診される。リンタンは、オーストラリア留学の経験があり、英語が堪能だと説明を受けたが、「メインストリームには英語ができる人がいない」と伝えると「日本語の研修があるので大丈夫」というのが奥平のこたえだった。

佐藤聡¹⁰⁾(以下、佐藤)：「大丈夫、日本語の研修するから」って言って来たんですけど、そんなに日本語しゃべれないんですよ(笑)。3ヶ月ぐらいやったぐらいで。でも、住み込みで2ヶ月ぐらいメインストリームで生活して。そしたらね、それはすごく面白かったんです。外国の障害者も面白いなと思って、みんなも仲良くなったから、明るい子だったし、とても楽しかったですね。それから毎年、受け入れるようになったんです。(佐藤 i2018)

第1期生のリンタンの「外国の障害者も面白いなと思って」というのは支援継続の大きな鍵となる。意気投合した廉田と奥平の仲を前提とした受け入れ依頼であったとしても、受け入れたからにはメインストリームは総動員でかかわるのだから1期生との経験が面白いものでなければ続かなかった可能性もなくはない。しかし、海外に関心の強かった廉田や佐藤にとっては様々な「外国の障害者との出会い」はメインストリームにしながら世界観が広がる絶好の機会でもあった。未知なる可能性をもったダスキン研修生たちの受け入れが本格的になっていく。

第2期生のミス¹¹⁾は、メインストリームで約3か月間の研修期間を過ごした。研修の際にスタッフやアテンダントと保存してあったメインストリームの過去のイベントやニュース映像などを鑑賞した。そこで日韓TRY¹²⁾のことを知り自国でTRYをしたいと言ったことがきっかけとなり日韓TRYの計画が進められた。

奥平：2期生の時、韓国のミスっていう(…)メインにいて、彼がまず感化されて韓国でトライをやったの。帰ったその年だったかな。(奥平 i2018)

ミスが研修生として来日していたのは2001年で、翌

年の2002年には日韓ワールドカップが控えていた。そこで「それにこじつけてイベントやろう」とメインストリームメンバー共々盛り上がり2001年の夏に釜山からソウルまでワールドカップで使用される施設のバリアフリーチェックをしながら歩いた。当時の経験について佐藤は以下のように語る。

佐藤：スタートすれば何とか行った人たちでがんばるから、日本のメンバーも韓国のメンバーも、うまくやれたんです。そこに若い人たちが行ってそれはそれでよい経験で、やった人たちもメインストリームに残っていったんですね。けっこう外国人とやるのも面白いなって思っていたんです、そのぐらいから。もともとの素地として廉田も俺も旅人だから、外国が好きなんですよ。(…)[先進国よりもやっぱアジアだな]っていうのがあったから、毎年ダスキン研修生を受け入れて、その中でけっこう、いい人が出てきたんです。(佐藤 i2018)

日韓 TRY は成功し双方のメンバーにとってよい経験となったのだが、その後、感化された当人のミンスは障害者運動に携わることはなかった。そのことについて奥平は、片足義足で障害も軽かったことから韓国で出世したかったことがあるかもしれないという。

廉田：人生大きく変えますよね、その人の。エリートで進んでいけるかも分からへんのをあえて何か、貧しい…、でもやりがいもある面白さも知ってるけども。「一緒にやろうや」って言うのは、相当、それを後悔しないぐらいにやりたいと思ってる人にしか勧められないですよ。俺はそうですね。だから、「ここやったら」とかって思う人もおるかもしれへんけども、俺はもう人で決めるから、そこは。「この国をやりたい」とかって考えたことはなくて、「この人やから応援しよう」。その国のバックグラウンドはあまり考えてないです。それが共産主義であるとかそんなこと考え出したらキリがないから、信頼だけですかね。そいつ人生変わるのもビクともしないぐらいな、やる気があって、「人生楽しめるような人やな」と思った時にしか、応援もしにくいかな、やっぱ。あとで後悔するかもしれないような仕事やからね、たぶん。そこちょっと考えますね。(廉田 i2018)

ダスキンの研修生は優秀といわれる障害者もいて、帰国後は公務員志望や大学教員を目指したいと考えている

人も少なからずいる。ミンスが将来をどう考えていたかは不確かだが、研修中で日本にいたミンスと韓国の日韓 TRY の運営側との紆余曲折がミンスを障害者運動から遠ざけてしまったとも考えることができる。廉田が「後悔しないぐらいのひとにしか勧められない」といった障害者運動は日韓 TRY の結果の成功体験よりも、その過程での出来事が障害者運動を選択するに至らなかったのかもしれない。

シャフィック¹³⁾は第3期生で、メインストリームで研修を受けていたのだが、宿泊している体験室に「オバケが出る」と言い始め半分程度の研修で他の研修先へ移った。その後、シャフィックたちが帰国する直前に、廉田から奥平に「もう1回、奴、よこしてくれ」と連絡がはいり1週間ないし2週間のフォロー研修を受け帰国した。

奥平：シャフィックが帰って、したら日本の状況とパキスタンの状況と全然違うわけじゃないですか。したら落ち込んでまた電話してきて。「誰も、僕の言うことを信じてくれない」って。「そりゃあ、だからそう言っただろ！」とかって言ったんだけど(笑)。で、泣きながら何回か電話してきて。なんか、その頃ダスキンもお金があったから、フォローアップで呼ぼうっていうことになって。

—：いっぺん帰って、泣いて電話してきて、で、もう1回来させたの？

奥平：あの、彼だけじゃなくて何人かね。まだ3期だったから、けっこう大勢呼んだかも。まだお金がある時期だったからね。で、フォローアップ¹⁴⁾っていうことで、過去に来た人を何人か呼んで、フォローアップって、した。その中にシャフィックがいて。札幌の DPI 世界大会だったと思うけど、シャフィックと廉田さんと私がたまたま同じテーブルで話してて、シャフィックが何か落ち込んでるっていうことを話したら、廉田さんが、「ほな、俺たちが行って盛り上げてやる。次の年の2月頃行ってやるから」とかつって、ポンって、あれいくらだったのかなあ、30万ぐらいかなあ、「これで活動続けろや」って言ったの。(奥平 i2018)

ここで、関連するエピソードを紹介しよう。第6回 DPI 世界会議札幌大会(2002年)¹⁵⁾の分科会「自立生活—世界規模、域内のネットワークづくり」に参加していたパキスタン人が会場で質問をしている。1つ目は、「私たち自身が助け合うべきだと言うが家から出る手段も何ももない人はどうすれば自立し他の人たちを助けることが

できるか」という問いに朴賛吾¹⁶⁾が重要な質問だと前置きした上で、「障害者自身の活動と自立センターをつくることが大事である」とこたえる。(全国自立生活センター協議会 2003:166)

2つ目は、「障害者の権利拡大に関連して障害者に力を与えたり、社会に出る前に彼らにモチベーションを与えることが必要だが落胆している障害者にモチベーションを与える手段を何か提案して頂けませんか」という問いに他の参加者がこたえた。「誰も他の人にモチベーションを与えることはできないが、その一方で家族からの強い支援、良い友人そしてコミュニティの支援があればそれを可能にすることもできる」とこたえる(全国自立生活センター協議会 2003:179-180)

この場での質問はパキスタン人としか分からないが、シャフィックが抱えていた課題とおなじであったことに違いはない。すでに廉田とは前年度の研修で出会っているが、この時点ではメインストリームは特定の国に支援はしていない。この支援の始まりは、メインストリームの総意であるか廉田の個人的な意思であったかについては疑問が残るところではあるが、シャフィックが自立生活センターをつくるための資金と友人からの協力(約束)を得られたことは事実である。メインストリームが国際協力として支援することになった一人目の友人がシャフィックである。

IV 奥平の経験と思い——過去の研修生として、そして受け入れ側として

ここからは、1981年に開始された「ミスタードーナツ障害者米国留学派遣事業」の第1期生であり後にリハ協に就職し「ダスキニアジア太平洋障害者リーダー育成事業」の研修生受け入れ担当者となった立ち位置からの奥平の語りを取り上げる。奥平自身が研修生としてアメリカで得たものが何であり何が糧となったのかをみとめる。

奥平：私自身ダスキンの研修生だったわけでしょ、アメリカで。だから、私はこの研修事業やる時に、自分がアメリカで経験したことをみんなに経験してほしいなと思ってやってたのね。それが一番大きいかな。生活を楽しむことであったり、あとは自分の障害をちゃんと受け入れられるように、権利意識とか自分の可能性を知ってるところとか、仲間の大切さっていうのを知ってほしいなっていうのはあって(…)国際協

力っていうか、私は、帰ってからでも、何か活動してほしいっていうのはもちろんあるでしょ。だから、そのために私がアメリカで…、…の人と繋がっているような関係を研修生にも作ってほしいなっていうのはあったかな。

——：日本に来て、日本の誰とかか組織とかそういうものとの関係を作って、戻っても維持するっていう。

奥平：なんとなくでもいいから繋がって、落ち込んだ時とか何か助けが必要な時とかに、相談できるような関係を作れるような人との出会いがあったらいいかなって

(奥平 i2018)

研修生が発展途上国から来日した際の障害の捉え直しや障害受容、権利意識や仲間の大切さといったような人との繋がりも「障害(者)」を通して得ていくことができる。人との関係性は、国や言語や文化が異なっても築くことができると奥平自身が経験として知っているからだ。また奥平の立ち位置から「つながり」の価値が実感としてある。だが、ここでは身体障害、肢体不自由という種別のなかでの「つながり」に限定される。中西・上野は、自立生活運動が理念通りに障害種別を越えられるかどうか予想は難しいとしながら、日本における身体障害者の当事者団体の経験と蓄積をもとに精神障害者や知的障害者の団体を応援し進めることで自立生活者が増え当事者グループが形成され状況はかわってくるであろうと述べている(中西正司・上野千鶴子:2003:106)。とすれば、ここでの話の射程内において、日本という限定された地域で障害種別を超える障害者運動もありうるという可能性を示唆するものである。

奥平は研修終了後に再度、一般企業に就職しJILを経た後、リハ協で選考する側の人となった。ダスキンの研修生の選考で、奥平には選ぶ基準でははずせないものがあった。そこで注視する点は、候補者がどういう人か、他の障害者とどのような接し方をしているか、障害者団体に所属しているか。無所属にしても他の障害者を嬉しそうに紹介してくる人なのか、健常者しか紹介してこない人なのか、となれば前者を選びバックグラウンドや学歴、家柄は全く選考条件には反映しない。ましてや政府の推薦であれば最初に落とすという潔さがある。奥平が選んだ人たちが研修終了後にCILを立ち上げ自国障害者たちを牽引するリーダーとして(パキスタンのシャフィック・韓国のチャノ)活躍するひとたちをみればその手ごたえ

は確かなものだ。

奥平：私もそうだったけど、海外で研修を受けたってことは、そのあともなにか国際派になるケースが多くって、色んな国飛び回ったりしてる人がけっこういる。

——：それがきっかけでね。少ないでしょうしね…、人口というか、その国の中で、そうした経験をした人っていうのは。そうすると目立つのがさらに増殖されてって、その国の中心人物になっていくのかな。

奥平：そう。私もそうだったけど、やっぱり他の言語を喋るっていうことで、掴めるチャンスもあると思う。大概、みんな英語も喋るし。みんなじゃないけどね。(奥平 i2018)

研修を経て得るものを奥平は、その一様でない道筋をいくつか挙げる。障害者運動に目覚める人、日本人と結婚する人、国際派になる人、ここのすべてに共通するのは、その国の中で日本へ行き研修を受けた経験者はごくわずかな人々であり、注目されたがゆえに自国での活動の中心人物になっていく。象徴的傾向を帯びるという視点からみれば、とくにアジア地域では障害者界隈で「リーダー研修といえばダスキン」というように研修を受けた障害者リーダーがリーダーを目指す障害者たちのロールモデルになっているともいえよう。

V 志 international ネットワークと活動

2003年、日本に支援費制度が導入されメインストリームには、すでに自立生活を始めていた障害者も多く制度開始後に介助派遣で財政的にゆとりができた。支援費制度が始まる前年度までは、全く資金には余裕はなかったが、そこからパキスタンの支援が開始される。このときにシャフィックの提案で志 international ネットワーク(以下、志メンバー)¹⁷⁾がつくられる。

佐藤によれば、廉田は自分たちは金持ちになろうと思って運動をしたわけではない。運動で得たお金は運動に使うようにする。職員の給与も賃上げはしたが、ある程度の年齢で上限金額に達すればそれ以上の賃上げはなくお金を残す。残ったお金をアジアでよい活動をしているところへ送る。基本的には、その国で最初のCILをつくるところに支援をするというスタンスである。2つ目以降のCILは、自国のひとたちでつくってもらう。資金援助の期限は、決めていない。資金援助を継続させるこ

とで、活動ができさらにそれがよい活動であれば継続しない理由にはならないという。立岩は、その人たちにかかわる共感や共有している帰属意識は多くの人にとって心地よいものだから、それが別の人や集団の排斥を帰結しないのであればそれが存在し存続することは好ましいことだと言えることもできるだろう(立岩 2018a: 311)という。

廉田：でもそうやからこそ、うちのスタッフも含めて、「カンボジアのセンターが潰れる時はうちが潰れる時と一緒にぞ」っていう気持ちではやってますけどね。「金がないからバイバイ」はもうできないんで。別にお父さんになってるつもりはないけども、こっちの方が裕福なんやから、ただそれだけのことやから。おんなじことやってね。だから「使えるもんはそこに使おうや」っていうのは、うちのスタッフはみんな承諾してくれてると思ってるけどね。そんなつもりでやってる感じなんです。自立センターそのものを自立さす時もね、もちろん自己決定とか色んなこと言いますよ。自己責任、自立するのは言うてもね。介助は絶対派遣せんことにはこの人生生きていかれへんわけやから、やっぱり背負うじゃないですか、その人の人生そのものを。場合によっては自立したがために、孤立して、「施設おった方がマシやった」いう人もひょっとしたらおるかも分からんぐらいな歩み方する人いますよね。それもひっくるめて、受けることじゃないですか。「丸ごと引き受けよう」っていう感じでやってきてる、「自立センター版」みたいなもんかな、アジアのセンター応援するのは。気持ちはそんな感じですかね。それは俺一人の思いじゃなくって、これはたぶん誰に聞いても同じこと言うと思います。よく海外の話は出ますし。ある意味かっこいいところあるんですけど、そういったことかなあ(廉田 i2018)

メインストリームには毎年、アジアのさまざまな国から研修生がやってくる。ただし、受け入れるのは基本的に長期で研修を受ける人としている。短期間の研修では、自立生活の概念は理解できても肌で感じる自立生活と自立生活運動は、研修生自身の中に落とし込むことはできないからだと考えているのだ。研修生は、上記のように日々の生活において、見たことがなかった障害者のひとり暮らしが驚きのものから当たり前の風景になっていく。時間を経て考えは変化していく。見たままの生活に自らの身体がそこにあって、さらに自国にいる重度障害

者たちがそのように生活することができたらと…という思いに至るまでには時間を要するのだと思う。考えがかわった研修生たちは(感化された)、帰国後にILセンターをやりたいと口にする。メインストリームのスタッフはそのことばを信じ1年後に現地を見に行くのだという。仲間はあるか、活動はできているか、それを見てできると判断したら支援を開始する。それは、「研修生」と受け手の間柄から「友だち」に親密性がともなう。そして、ネパール、台湾、カンボジア、モンゴルと見込まれた友だちがその国で最初の自立生活センターを立ち上げていくのである。

佐藤は志メンバー(各国)との関係性を以下のように語る。

佐藤：社会の環境が厳しい中で、素晴らしい活動をしているのを見ると、「俺たち完全に負けてるな」って思います。日本はある程度制度が整っているし、バリアフリーになって楽に生きていける中で、彼らは何もない中で一からやっていて、でもすごく気持ちもあって。「彼らに負けられないような活動を自分は日本に帰ってからせなあかん」ってすごく思うんですよ。(佐藤 i2018)

佐藤：途上国の支援それをしたことによって、日本の人たちがよりエンパワメントされていい活動ができるようになる。それは障害者だけじゃなくて、健常者もそうなんですよ。いっしょに連れて行くと、やっぱり彼らも見て同じように感じて、それで帰ってきて、またいい活動をすごいするんですよ。職員は行くとみんなよくなって帰ってきますね。日本は今から入ってくる人たちって、介助制度もあるし、色んなことが一通り整っているから、最初のことなんかわからないじゃないですか。でも途上国に行ったら、その最初のことが見れて、そこで頑張っている姿も見れるから、ものすごい刺激受けるんですよ。(佐藤 i2018)

志のメンバーは、支援する側、される側という位置づけではない。日本の活動を見て未来の自分の国の障害者の自立生活をかたちにしたいと活動をする発展途上国の障害者、そして、アジアの何もないところからつくっていくその様を見て日本の障害者たちが経験してきた過去を体現する日本の障害者。「自立とは、自分を取り巻いている環境を自分でつくっていく、その過程の中にこそあると思います」(全国自立生活センター協議会 2003:166)

というようにその過程を知ることができるのだ。それは、佐藤がいうように、障害者だけでなく健常者にもエンパワメントされ活動にいかされる。障害者運動は、障害者がやらなければならないものでもあるが、障害者だけのものでもない。CILで運動体として活動するのであれば、それを共にする障害がない人も含まれるであろう。障害の有無にかかわらず若手がなぜ運動に関心がないのか、または、関心が向けられないのか。そこに所属するすべての人が同じ方向をむく必要性はないが、この相乗効果と原点回帰は関心をもつきっかけになっているのではないかと考える。

廉田は、アジアの障害者たちと15…17くらいの年の差があるのだが、まるで同年代と会話をしているかのように感じ、廉田が発することばや懸ける思いがシンクロするかのようアジアの障害者たちに響いたというのだ。だからこそ、世代は違っても仲良くなれたのではないかという。

廉田：やり方はそんな感じかな、ちょっと古臭いし、ある意味。俺の中では「未来型」って呼んでるんやけどね。これ新しい感じなんです。そういうちょっと普通のアジアのネットワークみたいなのが今あるんですけども、そのこっから生まれたセンターみたいな、ネットワークの繋がりは。そりゃDPIとか、何かオフィシャルな横の繋がりととは全然違いますよ。特殊な繋がりがあ、やっぱ。

—:何かほんとに、人と人との関係って感じかな。団体と団体の関係じゃなくって。

廉田：あ、その今の。そうですよ。あの友だちの輪ですもん、単なる。だから、法人も何もないし。うん。まあそんな感じでメインストリームから始まっていて(…)ぎょうさんありますよ、教えてもらうこととか。やっぱり向こうの方が大変やもん。こんな日本で運動いうところで、ちゃんと役所と交渉するいうたら、部屋通してくれて、話聞いてくれて。向こうは門前払いもあれば、賄賂渡さなあかんとか、色々あるじゃないですか。何も教えられることなんかあらへんねんもん、俺らにとっては。日本のやり方で何ぼ学んだところで、相手が違うから。ノウハウは教えられるよ、介助サービスのこととか。でも最終的な交渉とかになってきたところでは何もできないし。(廉田 i2018)

研修としてまた友人としてノウハウは教えることができる。しかし、運動は自分の国で自らが起こっていか

なければならない。運動の進め方やアプローチも国の情勢を踏まえその国で「生」を営む障害者自身、運動の主体はあくまでもその国の人々なのである。

VI おわりに

本稿において障害者が海外の障害者に対して支援する際の実態を、一つの機関を中心として明らかにすることを試みた。メインストリーム協会の取り組みの特徴・特性は第一に 研修生と日々の楽しさの共有および研修や活動（日韓トライなど）を通じて自立生活運動を自国にて展開する意識を芽生えさせ信頼関係を構築する。第二にメインストリームのメンバーからみた研修生が自立生活センター開設に向けて実践したい意思を本気で持つ人であるかまた応援したい人であるかを見極めた後、メンバー総意のもと資金面とノウハウなどの支援を実施する。第三に支援される側、支援する側という位置づけではなく、廉田のいう「友達の輪」から対等な関係性のもとで共に障害者の自立を目指す。こうした事実から障害者の自立に向けて国を超えて変革する気持ちを持ち得る者などの条件がそろえば、研修生の受け入れはより効果的なものになる。

佐藤は「途上国の支援それをしたことによって、日本の人たちがよりエンパワメントされていい活動ができるようになる。それは障害者だけじゃなくて、健常者もそうなんです。いっしょに連れて行くと、やっぱり彼らも見て同じように感じて、それで帰ってきて、またいい活動をする」といった（佐藤 i2018）。政治・経済、言語や文化の異なる他国と活動をとにもすることは容易ではないことも事実であろうが、逆に活動の深化、成果を高めるというプラスに働く要素にもなっているということがいえる。

ではなぜ、一定のカリキュラムやテキストに基づくものではない研修で、その成果というものが、ぶれることなく当初の目的に沿うかたちで獲得できるのであろうか。

本稿の冒頭で、海外の障害者と国内の障害者とで、文化や国の事情を超えて、同じく障害のある者として、相互に十分に理解し、支援し、支援されることは可能なのだろうか、という問題意識を提起した。

そのことへの応答のひとつとしてどのようなことが考えられるであろうか。

まず、異なる言語、文化、制度をもつ相手としつつも、その目的とするところが「障害者の自立を目指す」とい

う点において共通しているということが、研修の成果に大きな影響を与えているのではないかという視点である。

この大きく異なる環境間での、同一の目標への働きかけ、という構図が海外との人材育成事業に特有の大きな流れ、柱の存在を想起させる。

伊東香純がいう、地域や文化の違いより障害のもつ（のおかれる）「障害」の共通性の方が大きいといった主張、すなわち障害があることによる共通性（伊東 2021）に人とかかわりも含めた「障害（者）」の共通性というものは、現時点で想定しうる。今後さらに多くの事例を検証することにより今回、推測されたことをより確かなかたちで捉え、射程を広げて検討し論じていきたい。

特記：本論文ではある人へのインタビューをその人の著作物と捉え、文献表には聞き手等を示したうえで、（廉田 2018）（あるいは（廉田 i2018））などと記す。

注

- 1) Community-based Rehabilitation: 地域に根ざしたリハビリテーション。リハビリテーションと機会の均等化、障害を持っているすべての人々の社会へのインクルージョンのための、一般的な地域社会開発の中での戦略である。障害を持っている人たち自身、彼らの家族、団体と地域社会、適切な政府や民間の保健、教育、職業、社会、その他のサービス、合同での尽力によって CBR は実行される（財団法人広げよう愛の輪運動基金・財団法人日本障害者リハビリテーション協会 2008: 89）。
- 2) 当該プログラムにおいて 2021 年までに 29 개국、141 名の研修生が参加している。募集要項にある研修期間は、約 10 か月の 9 月初旬から翌年の 6 月中旬までで受け入れ対象地域は、オーストラリア及びニュージーランドを除くアジア・太平洋地域であり受け入れ人数は最大 10 名としている。応募条件は、ダスキン障害者リーダー育成事業等と同じく障害のある本人でこれからリーダーとして地域社会に貢献したいと志す個人、年齢にも制限があるが学歴、職歴は問わない。ただし、連続した 10 か月の日本における研修に耐えうる能力、日本の生活への適応力、日本語または英語で話すコミュニケーション能力（手話含む）、介助者を必要とせず日常生活動作が自分でできること、その他に各国または地域で実施する面接の参加や自己による研修計画の立案が求められる。
- 3) 障害者及び高齢者の権利擁護活動、啓発活動、政策提言及び情報提供等の自立支援に関する事業である障害者や高齢者を対象とした自立に向けた権利擁護や啓発に関する政策提言、情報提供などや障害者総合支援法に基づく障害者福祉サービス事業である重度訪問介護・居宅介護・生活介護など 9 つの事業を行っている。

そのひとつに障害者の自立生活に関する国際協力事業があ

- る。国際協力事業「志 international」では、国内の団体である JICA、自立生活夢宙センター、障害者支援センターばあとなあ、(株)ユーダと協力し海外で自立生活センターや自立生活運動で活動する人たちの支援に携わっている。その他の活動に、「ダスキンアジア太平洋障害者リーダー育成事業」でアジアから障害のある研修生の受け入れが含まれ「ターニングポイント @ RYUGAKU」、「ASIA TRY」、メインストリームスタッフの単独海外修行研修(スタッフ研修プログラム)等を実施している。
- 4) 「第9回車いす市民全国集会・兵庫」のアテンダントサービスの導入について横須賀は運営委員の発言から肯定的な考えとして①障害者と介助者の関係の変容に対する興味関心(廉田)、②介助者供給の安定化、制度化(井内、西)、③自立生活(運動)に必要な仕掛け(山田)、④実利的な必要性(柴田)、⑤漠然とした必要性(大友)などに対し否定的な考えとして①運営に関する懸念(廉田、矢吹)、②介助者を使いこなせるかという不安(柴田)、③革新することへの抵抗感(西)、④金銭を介在させることへの抵抗感(井内、大友)、⑤経済的負担(大友)、⑥有償化により障害者運動にもたらされる弊害(柴田)、⑦アテンダントサービスを定着させる運動の展望が見いだせない(山田)と知見を述べている(横須賀 2016: 28)。
- 5) 1961年兵庫県生まれ。姫路市立飾磨中学校2年生の7月にバスケットボール地区大会に参加した折り、体育館玄関の屋根から転落し脊椎を損傷する。7か月の入院生活を経て一時自宅へ戻り、翌年の4月から岡山市の旭川療育園に入所する。岡山で2年間過ごした後、養護学校高等部ではなく姫路にいる中学時代の友人と過ごすため姫路東高校を受験し合格。1987年、関西学院大学商学部卒業。韓国(大学在学中)、ヨーロッパ一周(1985年7月18日～2ヶ月)、アメリカヒッチハイク、サンフランシスコからニューヨーク横断(1987年～1988年)を経験する中で「旅人のプロ」を目指す。現在、メインストリーム協会理事長。
- 6) 1992年、タイの障害者の自立生活にはまずは日本製の車いすが有効な援助手段ということになり、日本の障害者グループ11団体の協力を得て「アジアの障害者に車いすを贈る市民の会」(代表者:大分タキ、上野茂)が結成された。タイのカウンターパート先はタイ肢体障害者協会であり、このプロジェクトには ESCAP、第3回以降は郵政省国際ボランティア貯金からも援助を得ておこなった。中古の車いすは、強度があるものを集め主要な部品交換のリフォームは「市民の会」がおこない、朝日新聞厚生文化事業団が輸送、贈呈先の選定、贈呈、修理技術講習会の設定と経費の調達を担当した。プロジェクトの実施にあたり必要な障害者個人に届くこと、車いす修理技術が確実に伝わることや日本製の車いすであること、20kg以下の軽いもの、材質はアルミ、ステンレス、チタン製、形は前輪がキャスト、後輪は24インチのものを原則にして、片手で両輪が回せるもの、頸椎損傷用にフットレストがはずせるものなどについては必要時に条件を加え贈呈用の車いすを集め現地に届けた。
- 7) 「当事者主権」を最初に本に使ったのは立岩だと上野千鶴子に言われたことがあると記載がある。青木千帆子・瀬山紀子・立岩真也・田中恵美子・土屋葉 2019: 284、「自らの暮らし方は自分で決めてよいはずだ。彼らは生活の自律性を獲得しようとする。自らのこと、自らの生活のことは自らがよく知っている。こうして提供(資源供給)側の支配に抗し、当事者主権を主張する」(立岩 1995a:229 → 2012: 417)
- 8) 1957年富山市に生まれる。未熟児として生まれ重度の黄疸に罹り脳性まひ(CP)の障害を有する。1981年に開始された「ミスタードーナツ障害者米国留学派遣事業」(後に「ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業」)の第1期研修生。その後、日本から外国への研修生を送り出す仕事に、さらに、外国からの研修生を受け入れる仕事に長く従事する。現在は、笹川財団 総務部特任調査役・日本財団で障がい者の社会参加を加速するために結成されたワーキンググループや「The Valuable 500」関連で活動している。
- 9) リンタン・アユ・サンブディ Lintang Ayu Sambudi (1975生) 国籍はインドネシア。アジア太平洋障害者リーダー育成事業1期生(1999年) 障害は肢体不自由(ポリオ)。研修先は、メインストリーム、自立生活センター・オフィス IL (福島)、太陽の家(大分)。研修時の目的は、「1.自立生活に関する障害者団体での生活体験、2.障害者団体を組織するための方法を学び、情報収集をする、3.インドネシアにはアルミ製の車いすを製作する会社がないので、車いす製作の現場で管理運営などについて研修したい」としていた。
- 10) 1967年に新潟で生まれる。9歳で障害児となり4年間の施設入所を経て14歳の時に地元中学に戻る。大学時代に出会った障害学生と障害者によって自立生活に関心をもつ。1991年からメインストリーム協会で活動し2004年からDPI日本会議所属。現在、DPI日本会議事務局長。
- 11) ソー・ミンズ Seo Min-Su (1977生) 国籍は韓国。アジア太平洋障害者リーダー育成事業2期生(2000年) 障害は、肢体不自由(右足切断)、研修時は大学生。研修先は、メインストリーム(2000年12月8日～2001年3月30日)、ヒューマンケア協会(東京)、日立インフォメーションアカデミー(東京)、研修の目的は1.日本語の会話力を身につけ、日本の社会福祉の現状や日本文化を学ぶ、2.他の研修生の障害について理解する、3.自己の能力向上と、将来リーダーとして自国の社会に貢献するための資質の向上を目指す」としていた。
- 12) 日韓 TRY 2001年7月20日～8月15日(26日間)プサン～ソウル512キロが開催された。目的は、韓国のバリアフリーを求めてワールドカップの競技施設をチェックして回ることであったが、開催までには紆余曲折があった。メインストリームは、「素晴らしい活動をするための研修で、彼(ミンズ)はもうそれを身につけて実際に運動しようとしているのだから、帰って準備した方がいい」とリハ協に伝えるが研修中の為、帰国を却下される。4月に1回のみ帰国許可がおりたがその後、ミンズは7月まで日本での研修を続けた。その間の準備は韓国のミンズの友人たちが担うことになっていたが2001年5月時点で準備の兆しがなく、メインストリームの佐藤 聡と松島 裕(健常者)が韓国へ行き現地で課題とされていた「道や山は(状態)がよくなく歩けない」を一緒に歩き野宿もやり遂げ実践できることを確認し帰国。その後6月に韓国のメンバーがケンカし実行メン

- バーが全ていなくなる。ミンスから韓国 DPI に依頼をかけたが前述と同様の課題があがり、再度、佐藤が韓国へ行き現地での計画に携わる。日本からは筋ジムの藤原勝也と介助者の井上武史 他 33 名が参加する。日本実行委員は、松島、海老原が担当。
- 13) シャフィク・ウル・ラフマン Shafiq-ur-REHMAN (1977 生) 国籍はパキスタン。アジア太平洋障害者リーダー育成事業 3 期生 (2001 年)。障害は、肢体不自由 (ポリオ)。研修先は、メインストリーム、DPI 日本会議 (東京)、AJU 自立の家、AJU 車いすセンター (愛知)、太陽の家 (大分)、ヒューマンケア協会 (東京)、2002 年第 6 回 DPI 世界会議札幌大会 組織委員会 (北海道)、日本障害者リハビリテーション協会 情報センター (東京)。研修時の目的は、1. 自立生活運動、2. 自立生活センターの運営、3. 行政交渉。
- 14) シャフィクたちが受けたフォローアップは公益財団法人ダスキン愛の輪基金が資金提供したが、現在は日本財団アジア太平洋障害者フォローアップ事業となり、2015 年からダスキン愛の輪基金「アジア・太平洋障害者リーダーシップ育成事業」及び、国際協力機構 (JICA)「障害者リーダーシップ育成とネットワークコース (現、障害者権利条約の実践のための障害者リーダー能力強化コース)」の一部の研修修了生を対象とし日本財団の支援を受け実施されている。
- 15) 2002 年 10 月 15 日～18 日にかけて開催された。参加国は、112 カ国 (アジア・太平洋 35 カ国、アフリカ 37 カ国、ヨーロッパ 18 カ国、北米・カリブ 8 カ国、ラテンアメリカ 14 カ国)、参加者数は 3113 人 (初日のみ参加 550 人、4 日間参加 2563 人 (国内 1722 人・国外 841 人))。
- 16) 朴賛吾 バク・チャノ PARK Chano (1970 年生) 国籍は韓国。アジア太平洋障害者リーダー育成事業 3 期生 (2001)。障害種別は肢体不自由 (脊髄損傷)。研修先は、メインストリーム、ヒューマンケア協会 (東京)、DPI 日本会議 (東京)、自立生活センターヒューマンネットワーク熊本 (熊本)、沖縄県自立生活センター・イルカ (沖縄)、障害者地域サポートセンター CIL 湖北 (東京)、研修時の目的は、1. 日本の障害者自立生活センターで施行されているピア・カウンセリングを韓国での実施のため、技法と姿勢を学ぶ、2. 日本の自立生活センターで施行されているサービスとセンターの運営。3. 日本障害者運動リーダーのリーダーシップと組織の運営。4. 日本社会における健常者の障害者についての態度と障害者の文化を学ぶ。
- 17) 2003 年より活動開始。メンバーの自国での自立生活センター活動状況。2002 年ダスキン研修生のシャフィクはパキスタン・ラホールに設立、同じく 2002 年研修生のチャノも韓国・ソウルに「ソウル CIL」を設立し国の制度として介助制度を確立させている。2005 年、クリシュナはネパール・ラディプールに設立、2005 年研修生のリンは台湾・台北に設立し時間数はまだ少ないとされているが介助制度を導入している。2007 年研修生のサミスはカンボジアにセンターを設立、2008 年にはバイヤルがモンゴルに自立生活センターを設立している。しかし、一部のセンターは現在もメインストリームなどから資金の援助を継続して受けており、財政面以外の支援の方法については、自立生活センターの各代表者が定期的に日本へ出向き、会議の中で課題

への検討や情報共有をおこなっている。

文献

- 青木千帆子・瀬山紀子・立岩真也・田中恵美子・土屋葉, 2019, 『往き還り繋ぐ——障害者運動於&発福島の 50 年』生活書院。
- 荒木光弥, 2020, 『国際協力の戦後史』東洋経済新報社。
- 安積純子・尾中文哉・岡原正幸・立岩真也, 1990, 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店。
- , 2012, 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 第 3 版』生活書院。
- 廣野俊輔, 2016, 「自立生活運動としての「車いす市民全国集会」——1970 年代後半から 1980 年代にかけての運動」『福祉社会科学第 6 号』大分大学大学院福祉社会科学研究科。
- 伊東香純, 2021, 『精神障害者のグローバルな草の根運動——連帯の中の多様性』生活書院。
- 廉田俊二, 1987, 『どこでも行くぞ、車イス! (寝袋ひとつでヨーロッパの旅)』ポプラ社。
- , i2018, 「インタビュー 2018/08/10」聞き手: 権藤 真由美 於: 兵庫・メインストリーム協会。
- 中西正司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』岩波書店。
- 中西由起子, 2008, 「途上国での自立生活運動発展の可能性に関する考察」森壮也編『障害と開発—途上国の障害当事者と社会』IDE-JETRO アジア経済研究所: 229-256。
- 尾上浩二・熊谷晋一郎・大野更紗・小泉浩子・矢吹文敏・渡邊琢, 2016, 『障害者運動のバトンをつなぐ』生活書院。
- 奥平真砂子, i2018, 「インタビュー——研修の仕事 2018/06/30」聞き手: 立岩真也・権藤真由美 於: 東京・戸山サンライズ。
- 佐藤仁, 2021, 『開発協力のつくり方——自立と依存の生態史』東京大学出版会。
- 佐藤聡, i2018, 「インタビュー 2018/6/30」聞き手: 立岩真也・権藤真由美 於: 東京・戸山サンライズ。
- 立岩真也, 1995, 「私が決め、社会が支える、のを当事者が考える——介助システム論」安積他, 1995:227-265 → 2012 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 第 3 版』生活書院: 354-413。
- , 2018 a, 『不如意の身体——病障害とある社会』青土社。
- , 2018 b, 『病者障害者の戦後——生政治史点描』青土社。
- 横須賀俊司, 2016, 「アテンダントサービスの導入プロセスにみるアメリカ自立生活運動の受容に関する一考察」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』16 (1): 19 - 31。
- 財団法人広げよう愛の輪運動基金・財団法人日本障害者リハビリテーション協会, 2008, 『国際障害者支援シンポジウム報告書——途上国の障害者分野における人材育成の必要性和効果、及び援助機関のかかわり方』財団法人日本障害者リハビリテーション協会。
- 全国自立生活センター協議会, 2003, 『世界の障害者 われら自身の声——第 6 回 DPI 世界会議札幌大会報告集』現代書館。

ウェブサイト

- 麻生幸二, 1997, 「特集 / 「アジア太平洋障害者の 10 年」, 中間年を

迎えて アジアの障害者へ車いす贈呈」, 障害保健福祉研究情報システム

https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n186/n186_030.html (2021年11月13日取得).

松島裕, 2001, 「日韓 TRY2001 『タゴシッタ ギチャ』 (乗りたいねん電車!) 一日韓の障害者、韓国縦断! 512kmの旅」, 障害保健福祉研究情報システム

https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n243/n243_11.html (2021年11月14日取得).

Aspects of trainees and recipients in supporting Persons with Disabilities in Asia — From the practice of the Mainstream Association

Mayumi GONDO

In this paper, is it possible for Persons with Disabilities overseas and Persons with Disabilities in Japan to fully understand, support, and be supported by Persons with Disabilities, regardless of cultural or national circumstances? Raised an awareness of the problem. As a response (1) they have in common the point of “aiming for the independence of Persons with Disabilities”, and (2) Kasumi Ito says that the commonality of “disabilities” with disabilities is greater than the differences in regions and cultures. That is, the commonality due to having a disabilities (Ito2021) may have a great influence on the outcome of the training, and the commonality of “disabilities (person) ” including the relationship with people is I have Shown that it may be possible.

Keywords : Persons with Disabilities, Training business, International partnership, Different cultures, Independent Living Movement,

